

“A Lump of Deformity”—  
『ガリヴァ旅行記』における病気について

山内 暁彦

“A Lump of Deformity”: Diseases in *Gulliver's Travels*

Akihiko YAMAUCHI

Abstract

This paper examines diseases and deformities of the body and mind in *Gulliver's Travels*. Although Gulliver generally maintains his health in the remote nations, he is injured in many accidents. The book itself abounds with accounts of various diseases and deformities. Gulliver encounters many creatures whose bodies and/or minds are severely deformed. Among them are the Yahoos, the Laputans, the Projectors in the Grand Academy of Lagado, and the “immortal” Struldbruggs. Their deformities are exaggerated for the effects in the satiric narrative.

Conversations between Gulliver and his Houyhnhnm Master are also full of descriptions of diseases and abnormalities in the human race in general. In particular, the satire of the medical profession is very severe and effective. As Gulliver is a “surgeon,” his satirical description of the physicians is more convincing. Besides, a surgeon would be appropriate as an “author” of such a book as *Gulliver's Travels*, in which injuries and diseases are treated as weapons for satirizing man.

At the end of the book, Gulliver seems to have gone insane. He cannot live an ordinary life because of his narrow outlook on the human race. Even if the human race and the Yahoo race can be regarded as the same species, human beings do not have the same nature as the Yahoos. His problem is that he pays attention exclusively to the Yahoo nature of man. But one possible outcome of Gulliver's recovery from madness and his return to human society is implied in his anxiety about whether he might again be corrupted by his Yahoo nature. This outcome is indicated by his changing attitude toward his own family.

Various diseases and deformities depicted throughout the book as well

as Gulliver's unstable and unhealthy state of mind at the end may suggest the fact that the human race is always afflicted with various diseases and destined to live with them. Swift tells the world that man should hope to avoid such maladies and live a healthy and normal life.

## 序

ジョナサン・スウィフト Jonathan Swift の『ガリヴァ旅行記』 *Gulliver's Travels* (1726) には身体及び精神の畸形(deformity)が瀰漫している。身体の畸形は文字通りの畸形以外にも外科的な外傷や内科的な病気をも含む。精神の畸形は精神の病気のみならず道徳的な面での異常性をも含む。また畸形であるが故に異常であるものは、個々の人間の身体や精神であるに留まらず、人間が形成する社会にも及んでいるものであると考えられる。

ガリヴァは医学を修め、「船医」(surgeon)として航海に出る。様々な病気や異常を内包する『ガリヴァ旅行記』という作品の語り手が、多少なりとも「医術」の心得のある人物であるということは偶然ではない。作者スウィフトは、自らの目的である人類に対する諷刺を展開することのために、このような設定をしたに違いないのだ。仮に、ガリヴァが船医以外の職業を持っていたら、彼の語る物語は全く異なる様相を呈したであろうことは、容易に想像されることである。書き手が「船医」であることが、『ガリヴァ旅行記』が今我々の目の前にあるような作品であることにとって、必須の要件の一つであったと考えられる。

本論では、ガリヴァが個人的に遭遇する「病気」や「畸形」や「異常性」を取り上げる。それにはガリヴァ自身の持つものと彼が直接出会った人々の持つものが含まれるだろう。更に、ガリヴァが出会った人々との間で、とりわけフイヌムの主人との間で交わした対話を記した箇所において読者に披瀝される、人類全体に関する「病気」や「異常性」をも我々は見落としてはならないだろう。この小論では、作品に含まれる身体及び精神の「病気」や「畸形」や「異常性」をできるだけ多く取り上げようと思う。だが、その際、必要なのは、いかに多くの異常性が作品中に描かれているかを示すことではなく、それらが諷刺の中でいかなる意義を持たされているかを考察することであるということである。更に、本論では、作品の結末におけるガリヴァ自身の「狂気」について考察し、彼は果たして本当に異常であるのか否か、狂気から回復し、以前の健康なガリヴァに戻る見込みはないのか、作者スウィフトの意図はどうか、と

いう問題まで考察したい。

## I

ガリヴァ本人は、元来どのような肉体及び精神の持ち主であるだろうか。彼自身の語るところによれば、「顔にかけては、故国のたいていの男には負けないつもりだし、旅にいたからと言って、ほとんど日焼けもしていない」“I am as fair as most of my Sex and Country, and very little Sunburnt by all my Travels.”とのことである。<sup>1)</sup>他人の証言などはなく、彼の自己申告だけから我々は判断せざるを得ないのだが、一人称の物語の持つ性質上、これはいたしかたあるまい。参考のために『旅行記』の前に掲げられたガリヴァの肖像画も見ておこう。<sup>2)</sup>かなり個性的な顔立ちであるようにも見えるが、とりたてて美男でもない代わりに、醜男でもないように描かれている。また、何らかの精神的な疾患の兆候のようなものは、少なくとも筆者には認められない。ガリヴァは、外面的には、平均的な英国人男性であり、いわゆる普通人の一人であると考えて良さそうである。

次に、ガリヴァの健康状態はどうであろうか。彼の怪我や病気について簡単に見ておこう。第4篇「フウイヌム国渡航記」‘A Voyage to the Country of the Houyhnhnms’では、ガリヴァは次のように述べている。「この国に滞在中、私はただの1時間も身体の工合が悪いなどと思ったことはなかった。」“And I

---

1) Jonathan Swift, *Gulliver's Travels*, vol. XI of *The Prose Writings of Jonathan Swift*, ed. Herbert Davis (Oxford: Basil Blackwell, 1965), p. 92.

*Gulliver's Travels* からの引用は、すべてこの Davis 版による。引用箇所の記事、ページ数は、この順に本文中の括弧内に示す。翻訳は次の2点を参考にした。中野好夫訳『ガリヴァ旅行記』（新潮社、1951年）、平井正穂訳『ガリヴァー旅行記』（岩波書店、1980年）。

2) ガリヴァの肖像画は、1726年の Motte 版の肖像 (p. [ii]) と、1735年の Faulkner 版の肖像 (p. [xxx]) とで異なっている。Motte 版では身体も顔も右方を向いているのに対し、Faulkner 版では、身体は右向きで顔は左の方を向いている。秀でた額、大きな目、意志的な口元といった共通点は見られるものの、容貌も両者ではかなり異なっており、同一人物には見えない。服装も両者全く異なっている。1735年の Faulkner 版の『ガリヴァ旅行記』は4巻本のスウィフト作品集の第3巻であるが、この Faulkner 版のガリヴァの肖像は、同じ作品集の第1巻の巻頭に掲げられた、Charles Jervas によるスウィフトの肖像の方に、姿勢も全体のタッチやレイアウトも類似している。

cannot but observe, that I never had one Hour's Sickness, while I staid in this Island." (IV. ii. 232) 「こうして私は健康も上乘、心も極めて平静な日々を送ったのである。」 "I enjoyed perfect Health of Body, and Tranquility of Mind." (IV. x. 276) これらの言葉を信用すれば、少なくともフウイヌム国においてはガリヴァは健康だったことになる。また、それに先立つ三つの航海を含めた何年にもわたる長い旅行の暮らしの全般を通じて、彼は総じて心身共に健康な生活を送ることができたような印象を我々は受ける。このような印象を読者に与える要因は、ほとんどいかなる場合も彼の書く文章が淡々として平静を保っていることにも存するであろう。仮に、重病や大怪我をしているのであれば、文章にそれが現れるのではないかと思われるからだ。作品全体を通じて、ガリヴァという人物は、心身共に健康な、これといって大きな異常性を抱えてはいない人物であると言って良いだろう。

だが、作品を良く読んでみると、彼は常に健康を保ち続けたという訳ではないことに気付く。彼はたびたび傷つけられているだけでなく、生命の危険に曝されたことさえ一度ならずあったのである。第1篇「リリパット渡航記」 'A Voyage to Lilliput' の冒頭、リリパットの国民は、威嚇する為に実際にガリヴァに矢を射かけている。またブレフスキュの艦隊を拿捕する場面では、何千という矢がガリヴァに射かけられもした。また、いち早く情報もたらされた為に隣国へ逃れることができ、事なきを得たのであるが、ガリヴァは彼らによって反逆の罪で危うく餓死させられそうにもなったのだった。

リリパット滞在中は、全体として問題は少なかったとも言えるが、第2篇「ブロブディンナグ渡航記」 'A Voyage to Brobdingnag' では事情はかなり異なっている。物語のユーモラスな雰囲気には覆い隠されがちであるものの、巨人国でのガリヴァの生活は、まさに生死の縁をさまようような経験の連続なのである。農夫のもとで見せ物にされて重労働をさせられたり、雹に打ちのめされたり、猿にさらわれて大怪我をしたりと、ガリヴァの受ける災難は枚挙にいとまがない。驚に部屋ごとさらわれる場面では、驚は「私の体をほじくり出して啄み喰おうと」 "pick out my Body and devour it" (II. viii. 141) した程である。こうしてみると、ブロブディンナグでのガリヴァは、身体に対する暴力に曝され続けたと言っても過言ではない。『旅行記』の前半部分、特に第2篇では、彼は肉体的には健康であったとは到底言えないということが分かる。

ただし、先に述べたように、これらの生命の危険を我々読者はさほど深刻に受け止めず、ガリヴァは健康であったという印象を持ってしまうことも事実であろう。それにはいくつかの理由が考えられる。まず第一に、どんなに危険度

が高かろうと、ガリヴァは結局は何とか生き延びてしまうということが挙げられる。過労で「骸骨同然になった」“almost reduced to a Skeleton” (II. iii. 101) とか、雹に打たれて「10日ばかり外出もならなかった」“could not go abroad in ten Days” (II. v. 116) とか、猿に握り締められて「2週間ばかりも床につかなければならなかった」“forced to keep my Bed a Fortnight” (II. v. 123) とは言っているが、そうした状態についてそれ以上詳しく記述されることはない。そして肉体的な損傷の影響が文体に現れることもない。そのうちに彼は回復し、物語は次へと進行していくのである。

第二に、この篇でのガリヴァの物語上の役割にも我々の印象は起因するであろう。彼自身も述懐しているように、「私は毎日何か一つは宮廷にお笑い種を提供していたようなものだった」“I was every Day furnishing the Court with some ridiculous Story.” (II. v. 124) ということであれば、ガリヴァの災難が、ひどいものであればある程、深刻さは減り、それに反比例して滑稽さが増すという結果になっているとすることができるだろう。

第三に、ガリヴァの被る被害は、結局のところ、全て同じ性質のものであるということも、読者の印象と関係があろう。つまり、彼は、専ら物理的な外力に痛め付けられるのみなのである。その外力の形態は変化するものの、本質的な原因は、彼の身体が通常の12分の1であることに帰着してしまう。彼が数多くの外傷を受けたことは事実であるが、それらは全て、周囲の物体が通常より12倍（体積と重量では1728倍）大きいような世界に彼がいることによって、不可避的にもたらされた外傷であるのだ。いずれの事件もつまりは単純な繰り返しの過ぎないのである。

以上のような理由で、第2篇のガリヴァについては、災難の連続で確かに気の毒ではあるが、自ら犠牲となって「面白い見せ物」になり、冒険談を語ってくれた彼には、宮廷の人々共々、読み手としても大いに感謝したく思う、という程度の認識しか読者は持てないのである。第2篇の諷刺のテーマが、人間の肉体の醜悪さと脆弱さであるとすれば、醜悪さの方はプロブディンナグの巨人たちの拡大された表皮の様子描写により、脆弱さは専らガリヴァの度重なる災難により、表現されていると言えるだろう。諷刺の上での役割における必要性によっても、彼の身体は傷つけられる宿命を背負っていたのである。そしてよく多くの怪我から立ち直り続けたガリヴァは、肉体的にも精神的にも強いものを持っているに違いないという印象を読者に与えることになるのである。

第3篇「ラピュタ、バルニバービ、クラブダブドリッブ、ラグナグおよび日本渡航記」‘A Voyage to Laputa, Balnibarbi, Luggnagg, Glubbudubdrib and

Japan' では、第2篇とは対照的に、ガリヴァの身体には直接的な被害が及ぶことはほとんどなくなる。彼はそこでは身体を危険に曝してはいない。彼は傍観者という比較的安全な立場に立って、周囲の事物を観察し記述するという役割を担わされているのである。Kathleen Williams も、“in the third [voyage] he is so tenuous a character that we scarcely feel his presence”と言っているように、第3篇のガリヴァには存在感が希薄であるような印象を受けるのは、このこととも関係があるだろう。<sup>3)</sup> 『ガリヴァ旅行記』の後半部分においては、ガリヴァが健康である代わりに、彼の周囲が「病気」と「畸形」とに取り纏われていくことになる。そして、彼は自分が遭遇した者たちの持つ様々な異常性を目の当たりにし、精神的には徐々に打撃を被っていくとも考えられるのである。

第4篇でもガリヴァはあまり身体を傷つけられることはない。先に見た通り、フイヌムたちの間での生活は、表面的には大変健康的で安定したものであった。ただし、フイヌム国には例のヤファーがいて、ガリヴァに再三にわたって災難を及ぼす。ヤファーによって特に生命の危険に曝されるという程ではないが、糞尿を浴びせかけられたりして、衛生面ではかなりのダメージを与えられたであろうということは想像される。ただしそれは数度に及ぶものという訳ではない。フイヌム国でのガリヴァは、肉体的には健康を維持できたと考えて良いのではないだろうか。彼の健康の理由の一つとして、作者スウィフトは「粗食」ということを用意している。ガリヴァの「粗食」がヤファーの「食欲」ないし「雑食」と対比的に扱われていることによって、不健康なヤファーと健康なガリヴァという対照が、誰の目にも明らかであるように描かれているのである。

むしろ、第4篇で問題となるのが、彼の精神の状態ではないだろうか。簡単に言って、この国やこれに先立つ国々で様々な経験を経たことが、直接、間接の原因となって、帰国後のガリヴァは、正気を失い、精神に変調を来たしてしまった人物として描かれていると解釈できるのである。ガリヴァの帰国後の「狂気」については、後で詳しく論じることにして、ここでは、『旅行記』のほぼ全体を通じてガリヴァは、危険はたびたびあったが、それらをすべて何とか切り抜けて、心身ともに健康を良く保てたように見えるという解釈をしておくことにしたい。

---

3) Kathleen Williams, *Jonathan Swift and the Age of Compromise* (Lawrence: Univ. of Kansas Press, 1965), p. 196.

## II

次に、ガリヴァ以外の者たちの様子を順次検討してみよう。まずリリパット人たちについて。12分の1の大きさであることを除いて、彼らは肉体的には異常ではない。12分の1であるお蔭で、ガリヴァの目には彼らはむしろ美しく見える。彼らの問題は、外面にはなく、心性にある。そしてまた、腐敗した心性に基づく政治社会制度に問題がある。第6章で記述されているような、理想的とも見える制度がない訳ではない。だが宮廷の腐敗は目を覆うばかりである。リリパットは、その全体が病んでいるとは言えないまでも、政治的、社会的、道徳的な観点から見て、とても健全な国家であるとは言い難い。

次にプロブディンナグ人について。彼らの外見は確かに醜い。赤ん坊に授乳する巨人の乳母の乳房は吐き気を催す程であるし、町の通りでガリヴァが遭遇する乞食たちや病人たちの様子も、ただならぬ無気味さをたたえている。だが、その醜さは、彼らの大きさが12倍に、表面積でならば144倍に、拡大されている結果であるに過ぎない。普通の大きさに戻して考えてみれば、取り立てて言う程の醜さではない。それでもやはり彼らの様子は、現代の我々の目から見れば嫌悪感を催させるものであるかも知れない。だが、18世紀当時の衛生状態を考慮すれば、彼らの外面的な醜さや不潔さは、決して極端なものであるとは言えないだろう。それどころか、ガリヴァの言葉によれば、プロブディンナグ人は「公平に言って、彼らは顔立も良く整った種族だった」“I must do them Justice to say they are a comely Race of People.”のである。(II. i. 92) 一方、彼らの社会はと言えば、むしろ簡素で整った社会であると言って良い。プロブディンナグは、卑小なリリパット人たちの社会とは正反対の、素朴で健全な社会制度を備えた国家として創造されている。外見は魁偉であるが性質は決して醜くはないという人々が暮らす国なのであった。

ところで、プロブディンナグの宮廷には矮人がいる。彼は畸形である。外面的に畸形であるのみならず、ガリヴァを嫉妬していろいろな意地悪をするという面で内面的にも病んでいる。ただし、宮廷に矮人がいること自体何ら不自然なことではないし、王妃の寵愛を失ってしまったということは、ガリヴァを虐めることの正当な理由であり得るから、彼の精神が特に異常であるとは言えない。この矮人については、諷刺の観点から見た場合、あまり重要性を見いだせない。その理由は、恐らく、この種の畸形は作者の創作によるものではなく、現実において普通に見られるものであるからだ、ということであろう。妙な言い方であるが、この矮人は畸形の中でも正常な畸形であるということであり、

作品の諷刺に寄与するものの質が、他のスウィフト独自の創造物とは本質的に異なっているということであるのかも知れない。

ラピュタ人について。彼らも一種の畸形である。彼らの外見が内面の不均衡でいびつな状態を表している。彼らの頭は左右いずれかに傾き、目の片方は内側へ、もう片方は真上を向いているのである。実生活上の能力は皆無に等しく、音楽と数学の才能を除けば、彼らほど「つきあう相手として不愉快な人間に会ったことがない」“I never met with such disagreeable Companions.” (III. iv. 173) とガリヴァは述べる。

また、ラピュタの宮廷の或る貴婦人が走った相手の男は「年寄りで不具の下男」“an old deformed Footman” (III. ii. 166) である。物語の上では、特に不具である必要はないであろうが、相手が健常な者であるよりは、不具の者であるとした方が、女性の気まぐれに対する諷刺の強度は高くなり、読者の印象にも残るのは当然であるので、諷刺の効果を高めるためにここでは作者は敢えて下男を不具の者であるとしたのであろうか。<sup>4)</sup>

バルニバービの人々の様子も尋常ではない。通行人はすべて急ぎ足で、「目は据わっているし、妙に物凄い顔つきをしている。」“The People . . . looked wild, their Eyes fixed.” (III. iv. 174) 新しい企画を実行することにせき立てられ、平常心を失ってしまった人々が右往左往しているのである。

ラガードの学士院でもガリヴァは様々な病気に遭遇する。同一医療器具で正反対の治療を施し病気をなおすと称する医者の実験では、実験台の犬が猛烈な排泄をさせられて死亡し、見ているガリヴァを啞然とさせる。この場合、病気であるのはこの気の毒な犬であるというよりむしろ医者の方であることは言うまでもない。この医者だけでなく、学士院の教授達が皆それぞれに少しずつ症状の異なる精神の病気であるのだ。

ただし、第6章で語られる、政治企画士の研究の件に関しては、多少事情が異なる。彼らの意図や目的はむしろ正常である。常軌を逸しているのは、彼ら

4) この箇所のエピソードは、ウォンポール Walpole とモリー・スカーレット Molly Skerrett の関係にまつわる時事的なアリュージョンであると言われている。ただし、Brean Hammond によれば、ここでの諷刺の特定の対象は、上記の者たちと言うよりはむしろ、ジョン・ドーマー John Dormer という人物と、彼の妻ダイアナ Diana、従僕のリチャード・ジョーンズ Thomas Jones の三角関係を示唆しているものである由。ただし、トマスが不具者であったか否かは不詳である。Brean Hammond, *Gulliver's Travels*, Open Guides to Literature (Milton Keynes: Open Univ. Press, 1988), p. 54.



の意図や目的を実現する手段の方なのだ。対立する政党の構成員の後頭部を鋸引きにして脳髓を二等分し、反対派の脳髓と付け替えると、中庸な考えが出てきて良いのだとする提案などはこの類いである。文章の上だけでならば、政党間の争いの愚劣さに関する、大変単純で分かり易い諷刺ではあるが、手術の情景を実際に想像すると、この解決方法は何ともグロテスクなものである。グランヴィル Grandville のイラストレーションは、このグロテスクな無気味さを強調したものであると言えるだろう。<sup>5)</sup>我々にとっては、近代のロボットミ手術にまつわる恐怖などを如実に想起させるということもあり、この手術による解決方法は大変極端なものであるように思われる。この企画者は、真面目な目的を持ってはいるが、手段の点では常軌を逸した異常な考えに取りつかれていると言えるだろう。同じことが他の政治企画士の研究についても当てはまる。彼らもまたそれぞれが、現実には実現することが不可能な企画の発案をしているという点で、ある種の異常な者たちであると言っては言い過ぎであろうか。

さらに、この政治企画士たちを描いた箇所であらざるを得ないのは、病気のカタログとも称すべき一節である。元老院や枢密院の構成員たちがしばしば持っているのは以下のような各種の病気であると企画士の一人は言う。

過剰症、激発症、その他の病状から、さらにいろいろな頭の病気、ことに心臓の病気、激烈な痙攣、両手、ことに右手の神経および筋肉の萎縮、それから憂鬱症、張満、眩暈、精神錯乱、臭い膿だらけの瘰癧、腫瘍、酸っぱい泡状のおくび、犬のごとき食欲、消化不良、その他、おびただしい病気

redundant, ebullient, and other peccant Humours; with many Diseases of the Head, and more of the Heart; with strong Convulsions, with grievous Contractions of the Nerves and Sinews in both Hands, but especially the Right: With Spleen, Flatus, Vertigoes and Deliriums; with scrophulous Tumours full of foetid purulent Matter; with sower frothy Ructations; with Canine Appitites and

---

5) グランヴィル Jean Ignace Isidore Gerard (J.J.) Grandville によるイラストレーションは、次の文献で見ることができる。John F. Sena, “Gulliver’s Travels and the Genre of the Illustrated Book” in *The Genres of Gulliver’s Travels*, ed. Frederik N. Smith (London and Toronto: Associated Univ. Presses, 1990), p. 117.

Crudeness of Digestion; besides many others needless to mention.  
(III. vi. 187-88)

これらの病気を持つ議員たちに対して、種々雑多な薬品を処方せよという主張が続いて紹介される。色々な薬品名が多数列挙されて、テキストは再びカタログ状態を呈するのである。自然の肉体と政治的組織体に、文字通り同一の方法で、治療が行われるという訳である。

魔法使いの島クラブダブドリブでガリヴァが知るに至った事柄の中にも、病気は瀰漫している。ガリヴァが知ったのは、人類が歴史を経るにつれて退化し続けているという事実であり、色々な家系に様々な原因によって実に多種多様な肉体的精神的欠陥がもたらされてしまった、という事実であった。また、ガリヴァの同国人たる英国人についても同様である。「いかにしてあらゆる結果あらゆる種類の黴毒がイギリス人の顔つきを変化させ、肉体を腐敗にふやけさせてしまったか」“How the Pox under all its Consequences and Denominations had altered every Lineament of an *English* Countenance . . . rendered the Flesh loose and *rancid*.” (III. viii. 201) こうしてガリヴァは、人類の墮落を実例を以て知らされ、暗然とさせられるのであった。

このように第3篇では、ガリヴァの見聞する事柄の多くには、肉体や精神の異常や畸形が含まれているということが歴然としている。我々読者が、さぞガリヴァは暗い気持ちにさせられたであろうと思うのに十分な程である。しかしながら、彼にとっての最悪の体験はまだ終わっていない。それは例の「不死人間」ストラルドブラグである。彼らに関する情報をガリヴァが十分に得ていない段階での彼の楽天的な思い込みに基く記述と、老年によってもたらされる悲劇的な状況の下にある不死人間たちの実際の姿とが対比されることにより、老化現象の忌まわしさが描き尽くされるのである。ストラルドブラグに関する記述が一通り済んだ後で、ガリヴァは、永生に対する欲望が醒めたとか、心に描いていた楽しい幻影を恥じるようになったとか述べるに留めており、あまり感情を露わにしてはいない。これは彼のいつもの流儀であるのだが、実際には、彼らの悲惨な現実を知ってガリヴァも精神的に相当強い衝撃を受けたに違いないと我々読者に感じさせるのに十分な程、不死人間たちの描写は凄惨なものである。

先天的に「死なない病気」に冒されているという、非常に奇妙であるにもかかわらず現実味が全くないとも言えないのが「不死人間」ストラルドブラグである。東洋では「不老不死」と言い「不老長寿」と言うのに対し、“immortal”

という語には「不老」という意味内容は必ずしも包含されてはいない。あるいは包含されているにせよ、それは暗黙のものであるに過ぎない。この暗黙の了解とでも言うべきものの曖昧さを鋭く突くことによって生まれたこの「不死人間」という存在のみをもってしても、スウィフトの名は諷刺の歴史に残ったであろうとさえ思われるのである。Eddyはこのことについて、巧妙な表現をしている。“The only immortal part of the third part of *Gulliver* is the chapter on the immortal Struldbruggs.”<sup>6)</sup> 彼らの生そのもののあり方における「畸形」が、第3篇においては、最も強力に読者に迫ってくるものであることは疑いない。

ここまで考察して来たように、これらの「病気」や「異常」は、ほとんどの場合、非常に誇張された形で提示されていると言える。それは、諷刺家スウィフトが、それぞれの箇所において諷刺の対象である者たちを効果的に攻撃したり、諷刺のテーマを強調したりするために、読者にできるだけ強烈な印象を与えるという目的を持っていたからに他ならない。「病気」や「畸形」といった異常性は、また、いかなる読者にとっても身近なものであるために、諷刺という目的のためには最も好適な武器の一つでもあることは言うまでもない。そして、誇張された異常性には、読者に健全で望ましい状態を逆に思い起こさせるという効果も期待されていると考えられる。例えば、ストラルドブラグについては、以下のように考えられるだろう。永遠の生命を願うことは、人間としての当然の願望であるが、現実には老化は止められない以上、適当な時期に人生に終止符を打つことが正常なあり方であり、人間にとって最も重要な問題は、生まれてから死ぬまでの間にいかに生きるべきかということである。彼らの異常な姿には、このような趣旨のことを読者に改めて思い起こさせるという効果が存するのである。

### III

実際、ストラルドブラグは多くの読者の印象に強く残る者たちであろう。だがスウィフトは彼らよりももっと衝撃的な創造物を後世に残したのだった。ヤフーである。まず、テキストに即して、彼らの病気に注目しながらヤフーの生態を概観してみよう。ガリヴァは「この国で病気に罹る動物と言え、ただヤ

---

6) William A. Eddy, *Gulliver's Travels: A Critical Study* (Princeton: Princeton Univ. Press, 1923), p. 165.

フーだけである」“the *Yahoos* were the only Animals in this Country subject to any Diseases”と述べている。病気の原因は全てヤフー自身の「不潔」と「食欲」である。ヤフーの罹る病気は総称的に「フニア・ヤフー」すなわち「ヤフーの禍い」“*Hnea Yahoo, or the Yahoo's-Evil*”と呼ばれている。そして、「その治療法は、彼らの糞尿を混ぜ合わせて、これを無理矢理のどに押し込む」“the Cure prescribed is a Mixture of *their own Dung and Urine*, forcibly put down the *Yahoo's Throat*.” (IV. vii. 262) というものであるのだ。これは毒を持って毒を制すという言葉を実体化したような治療法ではあるが、医学的な見地から考えてみれば、実際には、この治療法では病気はかえって悪化してしまうに違いない。これは、病気の上にさらに病気の原因を押し込むという、凄まじい治療方法なのだ。しかしながら、ヤフーにはこれが靦面に効くというのであるから、ヤフーとはまさに想像を絶する畸形的な生物として創造されていると考える他はない。

ヤフーが肉体的な病気に罹る原因は、「不潔」と「食欲」であるとされているのだが、考えてみれば、ヤフーが「不潔」と「食欲」を好んでいるということ自体が、彼らの精神の異常さを体現していることではないだろうか。肉体的にも精神的にも救いのない程偏向してしまっている、哀れむべき“subhuman brutes”としてのヤフー。<sup>7)</sup> ガリヴァの遭遇する畸形の者たちは数多いが、その中で、やはり第一の衝撃力を備えているのはヤフーであると言えるだろう。

ヤフーについては既に多くが語られているが、本論の趣旨にそって彼らを定義し直すとすれば、以下のように言うことができるだろう。「人類が腐敗堕落した果ての生物。フイヌム国のみで生息する。雑食性。食欲、不潔、醜悪などの否定的な性質だけを持つ。人間の持つほとんど全ての悪徳の拡大誇張されたものを備えた、病的で畸形的な生物。」

ところで、ヤフーという生物を扱う場合の難しさはどういうことに存するのだろうか。それは恐らく、我々が、人と動物とを区別するという立場を取る、言い換えれば、人は動物ではないという考え方に従う限り避けることのできない難しさであるだろう。ヤフーとはあくまでも動物 (brutes) の一種でなければならぬ。にも関わらず、彼らは絶えず人類との間の境界を侵犯して来る。こ

7) “subhuman brutes”という表現は、*Miriam Webster's Encyclopedia of Literature* (1995)の“Yahoo”の項の定義による。OED<sup>2</sup>での定義は“an imaginary race of brutes having the form of men”となっている。両者共に人間との関わりにおいてヤフーをとらえていることが分かる。

これは、あまたある動物の種の中でも、最も人間と動物との境界に近い位置をヤフーが占めている (subhuman) ことによるものだ。この点で、ヤフーという存在は、我々読者、ないしは我々読者が含まれる人類全体にとって、この上なく厄介なものとなるのである。ヤフーを解釈しようとする際の問題は、この境界の侵犯ということと、侵犯されることに対して我々が抱く不安感とに起因するものであるだろう。仮に、ヤフーが、例えば妙なカマキリのような形態を持っているように創造されたと仮定してみれば、このことは分かり易いのではないだろうか。巨大カマキリが跳梁跋扈する世界は、極めて魅力的なSF的な悪夢の世界でありこそすれ、人類の腐敗堕落を諷刺するための道具としては、カマキリでは効果がないだろうということである。

改めて言うまでもない事だが、ヤフーの姿形や性質が人類のそれから派生したものであることは、作品の目的である人類に対する諷刺の遂行のためには必須の要件であるのだ。ヤフーはあくまでも人類との比較の対象として存在意義を持たされている。それもことごとく人類より「悪く」ないし「醜く」変化している必要があるのである。従って、ヤフーの性質がいかにかね曲がっているか、どのように貪欲、不潔、醜悪であるのか、といった事柄をここに列挙して確認しても、それは実際にはあまり意味のないことである。もともと彼らはそのようなものに作られているからである。

その上、大抵の点では人類より劣っているが、ある点では人類より優れた敬うべきところもある、などという留保のようなものも一切ない。ヤフーを実在する新種の生物であるかのように記述することが作者の主たる目的であれば、そのような配慮が働いたかも知れない。だが、諷刺家スウィフトの目的はそこにはなく、そのためヤフーはひたすら人類より醜く変形されているのである。この点はヤフーという生物種の存在における現実味を増すことに貢献してはいない。スウィフトは事実らしさよりも、徹頭徹尾、諷刺の強烈さを維持することを重視したのである。

さて、ヤフーの対照物としてはフウイヌムが用意されている。彼らについても一瞥しておこう。彼らは病気を知らない。従って医者などというものも彼らの間にはいない。フウイヌム国ではまことに健康で健全な社会が維持されている。若者は身体を鍛練して元気いっぱいであるし、老人は死に際しても超然としている。何しろ彼らは「自然の完成物」“*the Perfection of Nature*” (IV. iii. 235) であるのだから、健康であって当然なのだ。ヤフーが「病気」を一手に引き受けているのと同様に、フウイヌムは「健康」を独占しているという基本構造は、全く揺るぎないように見える。フウイヌムに限って言えば、それが魅力

的であるか否かは別の問題であるにせよ、彼らの国には「健康のユートピア」とでも称すべき社会が現出していると言っても良いだろう。

以上検討してきたように、ガリヴァが出会う生き物は、ヤファーを筆頭に、ラピュタ人、ラガード学士院の教授たち、「不死人間」ストラルドブラグなど、諷刺という目的を効果的に遂行するために、きわめてひどく肉体と精神を冒された畸形の者たちとして創造された者たちの連続であった。そうした者たちに取り囲まれたガリヴァは、周囲とは対照的に健全この上ない人物であるようにさえ見える。ガリヴァが最後までそうであるかは後で論じることとし、次にガリヴァの口を通して語られる人類のかかえる腐敗と病気について考えてみよう。

#### IV

第4篇「フウイヌム渡航記」には、フウイヌムの主人とガリヴァが折に触れて重ねた対談を後でまとめたものであると称される、かなりの分量の記述が含まれている。作者スウィフトは、その対談の中でガリヴァに人類についての説明をさせるという手段を用いて、人類に対する諷刺を異なる方向から展開していく。その際、ガリヴァの発した言葉の中で人類の罹っている病気の様々な様相が列挙されていく。すなわち、第4篇で言及される病気は、決してヤファーのみについて語られるのではないのである。ヤファーの病気と人類の病気とが組み合わせられることによって、ヤファーの属性である醜悪さがそのまま人類にも当てはめられることになり、その結果、人類とヤファーとの境界は、ガリヴァの頭の中においても、読者の頭の中においても、徐々に崩壊させられていくのである。

ガリヴァの語る言葉の中の病気に関するものに注意を向けてみよう。飲酒の弊害を語った箇所では、酒の所為で「揚句の果てに身体中病気だらけになって、生涯快々として生命まで縮めるものもある」“the Use of this Liquor filled us with Diseases, which made our Lives uncomfortable and short.”とガリヴァは述べる(IV. vi. 252)。読者は、次の第7章で、ヤファーたちがある種の木の種類によって酩酊状態になるということを知られるが、その際、読者は、ガリヴァの語る飲酒の弊害を考え合わせる事となり、人類とヤファーとを同一視するように仕向けられるのである。ここの箇所などは、人類とヤファーとを同一視させるために大変分かり易い技法が用いられている例の一つだと言えるだろう。

また、貴族たちに関する諷刺においても、病気と不健康が諷刺の武器として縦横に用いられている。フウイヌムの主人の面前でガリヴァは、主人の知らない貴族について解説する。貴族は「淫蕩な女相手に精力を濫費して、不潔な病

気をもたらってくる]“they consume their Vigour, and contract odious Diseases among lewd Females” (IV. vi. 256) ものであり、貴族の特徴とは「病弱な肉体、肉の落ちた顔、悪い血色]“a weak diseased Body, a meager Countenance, and sallow Complexion” (IV. vi. 257) であるとガリヴァは語る。ヤフーの中には、ボスのような者はいても、貴族に相当する者はいないらしいので、飲酒の弊害を諷刺した場合とこれとは状況が多少異なり、読者はヤフーと人類を対比して諷刺を理解するということにはならない。ここではガリヴァはあたかもスウィフトと同様の諷刺家であるかのように、専ら人類に批判の鋒先を向けているように見える。貴族に相当するヤフーがないこと理由は、作者スウィフトが貴族に対して諷刺を遂行するに際しては、わざわざそれらを存在させておく必要もないということなのかも知れない。それほど貴族という人種は、人類の中でもひどく病気に冒された者たちであるということになるだろう。肉体的な欠陥を揶揄するという手法は、貴族に対する諷刺としては常套的なものであるにせよ、病気に関する表現がこれほど効果的に、しかも分かり易く、ある特定の種類の人々に対して用いられた諷刺は、他にあまり類を見ないのではないだろうか。

ガリヴァとフイヌムの主人との対談は、「病気」や「異常」に関わる言葉に満ちていると言っても良いだろう。それは、ガリヴァが医者という職業について主人に解説をする箇所でも顕著な特徴である。ほぼ2ページにわたって医者と病気に関わる諷刺が展開されていく。ここで語られている内容に関しては、個別的な事項についても我々の関心を引き覚まされるような箇所でもある。それは例えば、「すべて病は飽食から来る]“all Diseases arise from Repeletion” のであるから、「大々的な排泄工作が必要だ]“a great Evacuation of the Body is necessary” という医者たちの原理の由来は何であるかや、嘔吐をさせる為の薬の成分として必要とされる様々な物質には、それぞれどのような意味がこめられているのかとか、摂取と排泄の機能を「上下の穴で取り替えること]“interchanging the Use of each Orifice” が本当に可能であるのかというような事柄などだ。(IV. vi. 253-54) 読者はガリヴァの説明の細部に注意を向けさせられ、フイヌムの主人がガリヴァの解説に耳を傾けた時に持っていたであろう好奇心と同じ好奇心を持って、この箇所を読むことになるのである。これらの表現の背景には、当時の医学界における新旧の学説の流行の状況があるとされてい

るのであるが、<sup>8)</sup> そうした状況に疎い現代の一般の読者は特に、個別的な諷刺の意味に関心を持つであろう。だが、個々の記述に含まれる意味の闡明は別の機会に譲り、今は医者に対する諷刺が作品の中でも特に強烈さと面白さとを兼ね備えたものの一つであることを確認しておくにとどめよう。

彼らに対する諷刺は、質、量ともに非常に充実したものになっている。フウイヌム国でガリヴァが心穏やかに暮らせたことの原因として、彼の地に存在しないことが逆に彼に利益をもたらしたものを列挙したカタログの中にも、初めの方に医者が挙げられていることもここに付け加えておこう。「身体を台なしにしてくれる医者も、財産を潰してくれる弁護士もいない」“neither Physician to destroy my Body, nor Lawyer to ruin my Fortune.” (IV. x. 276) のであった。以上のような箇所を読む限り、ガリヴァにとってそうであるのと同様、スウィフトにとっても、医者という人種は、政治家や法律家などと並んで、最も厳しく批判すべき対象の一つであったことは間違いのないであろう。

## V

医者に対する諷刺においては、大変見事な表現が用いられていると思わせるような記述は数多い。その一つが、次のようなガリヴァの言葉である。

医者たちの大きな取り柄は、予後徴候に対するすばらしい腕前である（これはまずたいてい間違えることはない）、つまり本当の病気の場合における予言力である。もっともそれは病気がいよいよ不治ということになってきた場合、したがって大抵は死相が現われ出した時のことであるが、それというのは死は彼らの力で自由になるが、治療の方はそうはいかないからである。

One great Excellency in this Tribe is their Skill at *Prognosticks*, wherein they seldom fail; their Predictions in real Diseases, when they rise to any Degree of Malignity, generally portending *Death*, which is always in their Power, when Recovery is not. (IV. vi. 254)

8) ヒポクラテス、ガレノス、パラケルススらの学説や、医療の歴史に関わるスウィフトの諷刺の意図、個別的な諷刺の意義についての詳細は、次のものを参照。Steward LaCasce, “Swift on Medical Extremism,” *Journal of the History of Ideas*, 31 (1970), 599-606.



「死は彼らの力で自由になるが、治療の方はそうはいかない」という表現は、神ならぬ人間の営む医学の持つ基本的な欠陥を、鋭く且つ滑稽に揶揄したものであり、この引用箇所は特に質の高い諷刺になっていると思われる。また医学の専門用語の用い方も的確であるように見える。このような医学関連の諷刺における質の高さや量の多さという作品の特徴と関連して、ガリヴァの経歴に注意を向けてみよう。ガリヴァは「船医」として航海に乗り出す。<sup>9)</sup> この「船医」という職業は、考えれば考える程、巧みな設定ではないだろうかと思われる。旅行記などの書物を執筆するには記憶力や好奇心だけでなく、ある程度の学識がなければならないだろう。ケンブリッジのコレッジとライデンの大学を出ているガリヴァであれば、基本的には平明な叙述が特徴である旅行記の文章くらいは、何の問題もなく執筆することが可能であろう。彼の文章力の結果が『ガリヴァ旅行記』であるということになる。航海中であれば、一般の船員が日常的に業務に忙殺されるのに対し、病人や怪我人さえいなければ、船医というのは比較的楽な仕事であるだろう。空いた時間に色々な書物を読むことによって、彼は人間社会の様々な様子を知ることができる。実際、ガリヴァは、そのようにして読書によって知識を得たということになっている。嵐などの緊急の場合は、船医でも一般の船員なみの仕事をせねばならぬこともあるのだ、と彼も言っているように、彼には折に触れて操船に必要な技術を習得する機会もあるであろう。そうして得た技術を応用して、ガリヴァはしばしば単身小舟で外洋に漕ぎ出しもすれば、プロブディンナグでは王妃の面前でボートを上手く操ってみせたこともある。また、ガリヴァは、ベイツ氏のもとで見習いとして働いた際には外科を習い、当時、医学の分野ではヨーロッパ随一とされたライデン大学では、内科を含む医学全般を修めているようであるので、肩書きは“surgeon”であるが、内科の方面にも対応することが可能であるのだ。<sup>10)</sup> 「医術」という特殊な技能のお蔭で、船医は一般の乗組員からだけでなく、船長以下の高級船員からも一定の尊敬を受けられる立場でもある。第3篇の末尾での日本からオラ

9) ガリヴァは、最後の第4篇において「船医」ではなく、「船長」に格上げになっている。第4篇でのガリヴァは、厳密には、「船医の経歴を持った船長」だということになる。ガリヴァの肩書きは作品のタイトルページにも明記されている。Faulkner版では“By LEMUEL GULLIVER, first a Surgeon, / and then a CAPTAIN of several SHIPS” (p.[1])となっている。Motte版のタイトルページ(p.297)でも、改行位置や字体など、細部は異なるが、文言は同一である。

10) 18世紀当時の医学の分野の区分は今日ほど分化し専門化した厳密な区分ではないことは言うまでもない。ここでの内科、外科の区分もごく単純化してとらえたものである。

ンダへの航海では、船医の仕事と引き換えに、半額で乗船させてもらえたなどということもあった。もちろん、彼は自分自身の怪我や病気にも普通の人よりは適切に対応することができるに違いない。このように、船医という職業を持っているがために可能となっている事柄は、物語の中では枚挙にいとまがない。

船医であることに伴う有利な事柄は数多いが、その中でも最も大きな意義を持つ事柄の一つが、先に取り上げた、医者に対する諷刺において彼の言葉がより以上に説得力を持ち得るということではないだろうか。「多少腕に憶えがある」“I had some Skill in the Faculty” (IV. vi. 253) というガリヴァによる説明であるからこそ、医者についての紹介には信憑性が備わることになるのである。これを、例えば法律家に関する諷刺の箇所と比較してみると、このことは一層はつきりするだろう。ガリヴァは「法律という学問についてはあまり知らない」“Law was a Science wherein I had not much conversed” (IV. v. 248) と言っているにもかかわらず、ガリヴァの語る法律家や裁判官についての話の内容は、諷刺としては医者についてのそれに勝るとも劣らぬ辛辣さを備えた、的確なものになっている。それにしては、どうして門外漢にこのような諷刺的な説明をすることができたのかという疑問が湧くところでもあるのだ。第2篇でも「法律」は諷刺のテーマになっていた。そこではガリヴァは、過去に大法院の裁判で酷い目にあったことがあるから法律については知識もあるのだと言っている。だが、数次にわたる航海の合間に、長期間かかることで悪名の高い大法院の裁判に彼が関わる暇があったということに関しては、多少、設定上の無理があるのではないだろうか。法律に関する諷刺について言えば、ここでは一介の船医ガリヴァが語っていると言うよりは、もっと法律や裁判に詳しい誰か別人が、ないしは作者スウィフト自身が、語っているかのような印象を多くの読者は受けるであろう。以上のような不自然さは、些細な点ではあるが、物語上全く問題ないとは言えない。これに対して、医者をも標的にした諷刺については、我々読者としては、全く自然にガリヴァの言葉をそのまま彼自身の言葉として受け入れることが可能なのである。また、先の引用のように医学用語が頻出していても全く問題ないと思わせるのである。もちろん、ガリヴァの背後にはスウィフトがいて、スウィフトこそが実際には諷刺を行っているのである。<sup>11)</sup>

11) ここでは作者スウィフトと語り手ガリヴァとの関係をごく単純化して考えている。両者の複雑な関係に関しては、次のものを参照。Jenny Mezciems, “The Unity of Swift’s ‘Voyage to Laputa’: Structure As Meaning in Utopian Fiction,” *Modern Language Review*, 72, 1 (January 1977), 1-21. Richard H. Rodino, ““Splendide Mendax”: Authors, Characters, and Readers in *Gulliver’s Travels*,” *PMLA*, 106, 5 (October 1991), 1054-70.

従って、医者に対する諷刺も、法律家に対する諷刺も、全く同一の構造を持っていると言える。だが、物語の自然さという観点から考えてみた場合、船医という立場にある人物の口を介して諷刺される対象としては、法律家などより医者の方がはるかに相応しいのではないかということを知りたいのである。

ガリヴァが船医であることの利点は、医者や医学に関する記述に自然さと信頼性を付け加えることであると言える。更に、これに加えて、ガリヴァの語る物語の中に、「病気」や「畸形」や「異常」といったものが瀰漫していることも、何ら不自然なことではなくなるという利点も指摘することができるのではないだろうか。怪我や病気、畸形や異常といった事象に関心を人一倍強く持ち、自分の文章にそれらを多く取り込んでいくということは、医者として全く正常な態度であろう。仮に、ガリヴァが船医以外の職業、例えば、商人であるとか、軍人であるとか、船の料理人であるとか、何でも良い、そういった何か他のものであったとしたならば、どうであろうかと考えてみれば良い。もし船医以外であれば、本作品のように、「病気」や「畸形」や「異常」に瀰漫したものの語り手ないし書き手として、不具合や不自然さが生じはしないだろうか。病気に関する記述に満ちた航海記の書き手として最も自然で最も適切な人物は、他の何者でもない、船医であるに違いない。スウィフトがガリヴァの本業を船医に設定したことの最大の理由の一つは、まさにこのことであつたと思われるのである。

## VI

「船医」ガリヴァは、数次の航海を通じて、「病気・畸形・異常」に取り囲まれ続けただけでなく、自分の書いた『旅行記』の内容も、結果的にはそれらに満ちあふれたものとなった。それでは、ガリヴァ自身の内面及び外面の健康状態はどうであるのだろうか。次に、ガリヴァ自身について改めて考えてみたい。

本論の初めに確認しておいたように、ガリヴァは平均的な健康な男性であり、特に異常な人物ではないと我々は考えた。だが、ここで改めて良く考え直してみると、それぞれの航海での通常とは異なる環境の下で、ガリヴァは、常に異常者として存在することを余儀なくされたのではなかったか。リリパットでは彼は「前代未聞の怪物」“the greatest Prodigy that ever appeared in the World” (II. i. 86) であり、プロブディンナグでも「珍無類の怪物」“a strange Creature” (II. ii. 97) として見せ物にされ、学者たちからは“*Lusus Naturae*” (II. iii. 104) すなわち「自然の戯れ」“a freak of nature”であるという判断

を下されてしまう。さらにフウイヌムからは「驚くべきヤフー」“a wonderful Yahoo” (IV. iii. 235) “a certain wonderful Yahoo” (IV. ix. 272) と称されるのである。ガリヴァー一人だけが周囲と決定的に異なるということによって、常に彼は「怪物」として扱われ続けたのである。こうした体験は、ガリヴァーという個人を我々と同じ現実の人間としてとらえる限りにおいて、彼の内面に大きな傷を残すはずのものであるに違いない。もちろん、『ガリヴァ旅行記』は小説ではないという立場を取れば、ガリヴァを小説の主人公として扱うことはできない。また、彼の内面を普通の人間の内面と同様に扱うことも適当ではないだろう。だが、我々は、本論においてこれまでもそうしてきたように、『ガリヴァ旅行記』は小説ではないという立場は取らず、ガリヴァを現実的な人間であると仮想して、更に論を進めることとする。

ガリヴァが肉体に受けた外面的な傷害については、先ほど検討した通りである。それは主として第2篇に集中していた。それらはいずれも、ガリヴァが、外界との比較の上で非常に小さな肉体を持つが故の災難であり、物語の基本的な設定から必然的にもたらされた帰結であった。また、それらの災難は、物語を面白くするという機能を担わされていたが為に、ガリヴァの受ける外傷は深刻なものとはなっていなかった。

それに対して、『旅行記』の結末近くでガリヴァが受けた外傷には、これらよりはるかに深刻で重大な意味が込められている。それは、彼がフウイヌムの国から不承不承ながら退去させられた後、初めに遭遇した原住民の放った矢によって受けた傷である。「野蛮人は矢を放ってきたが、それが私の左膝内側深く刺さったのである」“The Savages . . . discharged an Arrow, which wounded me deeply on the Inside of my left Knee” (IV. xi. 284) とガリヴァは記している。矢が刺さった部位にも意味があると考えられる。「左」はむろん不吉 (sinister) な側であり、「膝」は、脚力の中心であることから、恐らく人間の生命力や生活力を意味するであろう。「内側」は、この矢傷が肉体的な外傷であるだけでなく、内面的、精神的な外傷でもあることを暗示していると見て良い。フウイヌム国を離れて他所へ行っても、そこには矢を射かけてくるような野蛮人がいるのみなのだ。この野蛮人に代表されるヤフーすなわち人類の間では、もはやガリヴァには生きる道がないことを思い知らされる一撃であったのである。『旅行記』の初めのリリパットでも、ガリヴァは小人たちに再三にわたって矢を射かけられていたということをも、ここで考え合わせても良いかも知れない。リリパット人やブレフスキュ人の放った矢は、その数こそ無数であったものの、ガリヴァという一人の人間にとっての重大さという観点からは、野蛮人

の放った、たった一本の矢に遠く及ばないのである。野蛮人の矢は、少しそれただけで、ガリヴァの左の膝ではなく、左の胸すなわち心臓を射抜いていたかも知れない。また、矢がガリヴァの恐れたように毒矢であり、膝以外の場所に命中したのであったのなら、人体のほとんどの部位には口は届かないので、ガリヴァは、毒を吸い出すことができず、確実に死んだであろう。このように考えを広げてみれば、この一本の矢の持つ重大な意味が改めて浮きぼりになるのではないだろうか。

## VII

ところで、ここで注意しておかねばならないことは、ガリヴァにとっては、フイヌム国のヤフーも、南海の野蛮人も、ひいては母国イギリスを含むヨーロッパの人類も、皆同一の生物種「ヤフー」として認識されているという点である。ヤフーと人類との間に先に我々が想定した境界は、ガリヴァの内面においては既に完全に崩壊してしまっているのである。ヤフーと人類との間に区別を見い出そうとする態度を、仮に理性的な態度であると称するならば、『旅行記』の結末のガリヴァは、理性を失った狂気の人物であるという見方が成り立つ。夫人や子供を見ても嫌悪感しか覚えず、厩舎で馬と会話することを楽しみとする「人間嫌い」のガリヴァは、確かに正常な人間であるとは言い難い。ガリヴァは妻子に再会した時の状況を次のように述べている。「彼らの姿はいたずらに憎悪と嫌忌と侮蔑の念をおこさせるばかりだった。」“the Sight of them filled me only with Hatred, Disgust and Contempt.”「家に入るや否や妻は私を両腕に抱いて接吻したが、... 私はたちまち一時間ばかりも気を失ってぶっ倒れてしまった。」“As soon as I entered the House, my Wife took me in her Arms, and kissed me; at which . . . I fell in a Swoon for almost an Hour.” (IV. xi. 289) このようなガリヴァは、あたかも狂人であるように見えることは事実である。だが、彼の「狂気」はどの程度のものなのだろうか。以下においては、ガリヴァの精神状態について改めて考えてみたい。

ガリヴァはフイヌムを崇拝しヤフーを憎悪するあまり、狂人になった。だが、事態はそれほど単純ではないように思われる。我々は自問せねばならない。ヤフーと人類とは別のものであるという我々の考え方は本当に正しいのか、と。つまり、ヤフーが人類と区別できないのであれば、ガリヴァこそが正常な判断をしていることになりはしないだろうか。あるいは、ヤフーと人類とを区別

しようとしても、それは意味のない試みであって、無駄な努力に過ぎないのだということ、むしろ、区別をしようという試みを執拗に続けることこそが、異常な態度であるということをスウィフトは言っているのではないだろうか。ヤフーと人類を同一視すること、より正確に言えば、ヤフーが狭義のヤフーであるのと同様に、人類もまた広義のヤフーであるという判断こそが正常な判断であるという可能性はないのだろうか。

ガリヴァに人類をヤフーと同一視させることは、作者スウィフトの基本的な諷刺の戦略である。語り手ないしは書き手であるガリヴァが、人類をヤフーと同一視すれば、結果的に作品の内容としても、人類とヤフーは同一のものとして扱われることになる。読者はガリヴァの視点を共有することによって、ヤフーと同一視された人類に対する批判を受け取る。ところが、読者の中には、人類をヤフーと同一視することには耐えられないような読者も存在する。そして、そのような種類の読者は少なくないということを、スウィフトは十分承知していたに違いない。基本的な設定自体を容認できないような読者の神経を逆撫でするということも、作品の目的の一つであったと考えられる。ヤフーは人類を貶めるものであるという趣旨の言説が、過去から現在まで、大変多く見られることこそが、このことの証左であるだろう。「私の仕事の目的は、世間を楽しませることではなく、怒らせることだ」“The chief end I propose to my self in all my labours is to vex the world rather than divert it”<sup>12)</sup> というスウィフトの有名な言葉の意味は、以上のことをも含むものである。

では我々が怒ることなく作品を楽しむためには、どのようにすれば良いだろうか。ここで、先ほどのヤフーの定義に立ち戻って考え直してみよう。ここでは我々は、ヤフーは人類とは別個の生物であるという立場を取り、次のように定義をしておいた。「人類が腐敗墮落した果ての生物。フイヌム国のみで生息する。雑食性。貪欲、不潔、醜悪などの否定的な性質だけを持つ。人間の持つほとんど全ての悪徳の拡大誇張されたものを備えた病的で畸形的な生物。」そして、更にこれに付け加えて、ヤフーは「ひたすら人類より醜く変形されている」とした。しかしここで、試みに、ガリヴァの認識に従って、ヤフーと人類との境界を一旦取り払い、人類とヤフーを同類として考えることの可能性について

---

12) “Swift to Alexander Pope, 29 September 1725,” *The Correspondence of Jonathan Swift*, ed. Harold Williams, 5 vols (Oxford: Clarendon Press, 1963-65), III (1963), 102.

検討してみよう。そして、上の定義を考え直すことにしたい。この定義は「フイヌム国のヤフー」にしか当てはまらないからだ。通例、「人類」と称される、フイヌム国以外に生息している「ヤフー」、すなわち、ヨーロッパやその他の地域の「ヤフー」をも包含するヤフー全体の定義として、例えば次のような定義はどうであろうか。ヤフーとは「雑食性の哺乳類。貪欲、不潔、醜悪などの否定的な性質と、節制、清潔、美麗などの肯定的な性質を合わせ持つ。地球上の様々な場所に住む。フイヌム国に生息する一族は他より病的で醜悪な変種である。別名、人類。」否定的な性質と肯定的な性質の混在としてのヤフーすなわち人類という観点を導入することと、狭義のヤフーをフイヌム国の中だけに囲い込むことの、二つのごく簡単な操作を加えるだけで、一挙に問題は単純化してしまった観がある。ガリヴァの誤謬は人類をヤフーと見なしたことにあるのではない。人類とヤフーは同類だと言っても良いからだ。だが、我々の属している人類は様々な側面を持たされている。その中にはもちろんいわゆるヤフー的な側面もある。そしてそれは、場合によっては大変常軌を逸した発現の仕方をするものである。しかし、そうであるからと言って、ガリヴァのように人類の持つヤフー的な側面にのみしか目を向けられなくなってしまっただけという事にはならない。この視野の狭さこそが、ガリヴァの、悲劇的とも喜劇的ともどちらとも呼べる、異常な精神状態と異常な行動の直接の原因であったのである。

ガリヴァは、自らの『旅行記』の締めくくりとして、次のように述べている。「心身ともにそれこそ醜悪、悪疾の塊みたいな奴輩が、いかにも高慢に思い上がった様子を見ていると、もう矢も楯もたまらなくなる。」“But, when I behold a Lump of Deformity, and Diseases both in Body and Mind, smitten with *Pride*, immediately breaks all the Measures of my Patience.” (IV. xii. 296) 個人としての人間を「醜悪の塊」“a Lump of Deformity”であると称する彼の認識は、普通の個人に対しての認識としてはいかにも厳しいものであるにせよ、その人間の持つヤフー的な面のみを目を向けて判断を下している限りにおいては、全く的確で正しい表現であると言わざるを得ない。しかしながら、世間には「身体を台なしにしてくれる医者」だけでなく「怪我や病気を治してくれる医者」も実際にはいるはずである。あるいは、同じ医者が、ある時には治療に失敗するかもしれないが、ある時には上手く成功するということもあり得る。このような極めて平凡でありまた常識的である判断は、諷刺という枠組みの中においては、人類に関する判断力における視野狭窄とも言うべき「病気」に冒

された「人間嫌い」ガリヴァの言葉を通じて、極端で不合理とも思える断罪へと変化させられているのである。

ただし、ガリヴァが人類とヤフーを同一視するに至ったこと自体は、フウイヌム国での彼の様々な経験を考えてみれば、きわめて正常な反応であったと言うことができる。この点に関して、Conrad Suits は次のように述べている。“Gulliver’s response to his own kind is no more to be wondered at than the response of the man returning to Plato’s cave after a vision of Reality . . . or St Paul’s condition after his heavenly illumination . . .”<sup>13)</sup> また、我々読者がガリヴァと共に狭義のヤフーを嫌悪することも、何ら異常なことではない。問題は、全てのヤフーすなわち全ての人類を嫌悪することなのである。あるいは、人類の持つすべての性質を嫌悪することなのである。人類とヤフーの基本的な差異を無視してしまった点で、彼は正常であったとは言い難いのである。Kathleen Williams は、この点に関して次のように述べている。“Gulliver is right to condemn much of human life, but his insistence that all human beings are merely Yahoos causes him to dismiss *all* humanity as worthless and disgusting.”<sup>14)</sup>

### VIII

作品の結末におけるガリヴァの精神は、正常か異常かと問われれば、正常と異常の境界線上を、異常の側にかなり大きく踏み出してしまっていると言わざるを得ない。確かに、我々を含めて、多くの読者にとって、作品の結末におけるガリヴァは「狂人」であるように見えるであろう。しかし、それも畢竟するところ、相対的な判断であるに過ぎない。ガリヴァよりももっと異常性の度合いの甚だしい者を我々が想像することは、たやすいことである。例えば、作品に実際に描かれたのとは別のガリヴァの最後の状態を想像すれば、精神的なショックによって完全な失語症に陥ってしまったり、記憶を全てなくしてしまったりするという結末もあり得たのではないかと考えられる。ところが、我々の

13) Conrad Suits, “The Rôle of the Horses in “A Voyage to the Houyhnhnms,” *University of Toronto Quarterly*, 34, 2 (January 1965), 128.

14) Kathleen Williams, “Jonathan Swift” in *Sphere History of Literature 4, Dryden to Johnson*, ed. Roger Lonsdale (London: Sphere Books, 1971), p. 75.



知るガリヴァは、それほどの激変は経験しておらず、作品の設定上は、帰国後に自身の『旅行記』を執筆出版することすらできたということになっている。一般的な意味での「理性」は全く失っていないのである。

また、最近の映画化された『ガリヴァ旅行記』<sup>15)</sup>の中でのガリヴァのように、過去と現実の区別がつかず、周囲から見れば謔言を喚いているとしか見えないがために、本当に「ベドラム」に入れられてしまうというようなことも、物語の展開としては十分あり得るであろう。スウィフトの描いたガリヴァは、そこまで狂っているとは世間からは見なされておらず、妻子とともに普通に自分の家で生活しているのである。その上、彼は彼なりに、人類との生活に自分を適応させようという努力さえしているようにも見受けられるのだ。ガリヴァは自分の姿を鏡に映してみても、漸次人間の姿に我慢ができるような練習をしたりしている。そして、その甲斐あってか、「先週以来、ようやく家内にも食事の際、長卓の向こうの端に座って、私の尋ねる2、3の質問に対し、(できるだけ簡単にではあるが)、返事をするを許してやった」“I BEGAN last week to permit my Wife to sit at Dinner with me, at the farthest End of a long Table; and to answer (but with the utmost Brevity) the few Questions I asked her” (IV. xii. 295) と述べているのである。これは、英国に戻った直後のガリヴァの態度や精神状態と比べてみれば、大変な変化であり、格段の進歩であると言えるのではないだろうか。筆者の知る限り、従来は、ガリヴァの「回復」という点を強調した論者はいないようである。大抵の論者はガリヴァの「狂気」を最終的で決定的なものに見なしている。その典型的な例は、Hermann Real と Heintz Vienken の次のような断定に見られる。“The ending of the travels is also the “end” of Gulliver, if not physically, then at least emotionally, morally and intellectually.”<sup>16)</sup> だが、我々としては、敢えて批評の大勢に異を唱え、スウィフトは、ガリヴァの回復と社会復帰の可能性について一定の示唆をここで読者に投げ掛けているのだと解釈したい。自分自身をもヤファーであると見なしているガリヴァが、ヤファーを知る以前の、無知であり、またその

15) 脚本 Simon Moore、監督 Charles Sturridge、アメリカ・イギリス合作、1996年。本作品の批評は次のものがある。Michael DePorte, “Novelizing the *Travels*: Simon Moore’s Gulliver,” *Swift Studies*, 12 (1997), 99-102.

16) Hermann J. Real and Heinz J. Vienken, “The Structure of *Gulliver’s Travels*,” in *Proceedings of the First Münster Symposium on Jonathan Swift*, ed. Hermann J. Real and Heinz J. Vienken (München: Wilhelm Fink Verlag, 1985), p. 207.

ために健康的でもあったガリヴァに戻ることはあり得ないにせよ、また、彼にとって人類すなわちヤフーの社会の中に再び入り込んで行くことは、誰にも予測のつかぬ程困難なことであるにせよ、その方向で物語は閉じられていると解しても、大きな誤りではないように思われるのである。

確かに、「ガリヴァ船長から従兄シンプソンへの書簡」‘A Letter from Capt. Gulliver to his Cousin Sympson’を本編の物語と同等に扱い、作品の本体に含めて考えると、読者の印象としては、ガリヴァは人間社会から完全に縁を切ってしまうたいということを考えているようにも受け取れる。それは「もつとも、それも今では、そんな夢のような計画はいっさい考えなくなりました」“I have now done with all such visionary Schemes for ever.” (p. 8) という、「シンプソンへの書簡」の結びの言葉によって決定的なものとなっている。だが、その直前で彼はこうも述べていることに我々は注意すべきである。「最後の帰国以来、実にやむを得ないことではありますが、少数のヤフーども、ことに小生家族の者どもと口を利きます関係上、ふたたびヤフー的な本性の腐敗が多少始まったようであります。」“I must freely confess, that since my last Return, some corruptions of my *Yahoo* Nature have revived in me by Conversing with a few of your Species, and particularly those of mine own Family, by an unavoidable Necessity.” (p. 8) これは逆説的な言い方になるが、彼の危惧している「ヤフー的な本性の腐敗」がもっと進行し、ガリヴァが普通のヤフーになりさえすれば、彼の社会復帰は完了するということではないだろうか。もちろん、それは、今のガリヴァにとっては望ましいことではない。彼の理想はあくまでもフウイヌムであり、最も心が安らぐのは、2頭の退化したフウイヌム、すなわち彼の飼っている馬と会話することであると言うのであるから。しかしながら、先に我々が定義し直しておいたような意味を彼がヤフーすなわち人類にもう一度見いだせないまま終わるとは言い切れないのも事実ではないだろうか。

ここで思い起こされるのが、フウイヌムたちの二大美德である「友情と仁慈」“FRIENDSHIP and *Benevolence*”である。これは「全種族に行き渡っている」“universal to the whole Race”のだそうである。また「自然というものは彼ら全種族を一様に愛するように教えている」“*Nature* teaches them to love the whole Species” (IV. viii. 268) ということである。ガリヴァが本当にフウイヌムに心酔しているのであれば、ヤフーであるガリヴァは、自分の同胞である他のヤフーたちに対して「友情と仁慈」を以て接することができなければならないはずである。人類との付き合いを再開して行くことをガリヴァに期待するこ

とが可能であるとすれば、その根拠の一つが、フイヌムたちの実践している徳であるということである。第2篇の結末でガリヴァは、かなりの時間を要したものの、巨人を見慣れていたことによる視覚の異常を克服することができた。今回もまた同じように人類に対する「視覚」を正常化できないとは言い切れないであろう。

その後のガリヴァの生き方がどのようなものとなるのかは、すべて読者の想像に委ねられている。我々は、それを良いことに勝手な想像をしているに過ぎないと言えないこともない。ガリヴァが徐々に「人間嫌い」という精神の「病気」から回復していった欲しいという我々の楽観的な願望は、「ヤフー的な本性」が、諷刺という手段では除去することはできない程、人類の中に根深く巢食ってしまっている「病気」であるに違いないという悲観的な観念の単なる裏返しであるのかも知れない。いずれにせよ、作品の結末においては、一個のヤフーとしてのガリヴァが「正常」と「異常」の境界線上にあって苦悩しているように見えるということだけは確かなことであろう。それを悲劇的と見るか、喜劇的と見るかもまた、読者の自由であることは言うまでもない。少なくとも、作者スウィフトは、そのようなガリヴァの不安定で不健康な姿を通じて、人類という存在自体が、ヤフー性という「病気」に取りつかれた、苦渋に満ちた存在であることと、その「病気」とともに生きることを宿命付けられたものであるということをも、暗に示しているように思われてならないのである。

## 結 び

以上、論じて来たことから明らかとなったのは、以下のような諸点である。『ガリヴァ旅行記』は、ガリヴァ自身やガリヴァの会う者たちだけでなく、ガリヴァの語る人類一般の様態に至るまで、怪我や病気、畸形や異常によって瀰漫している。そして、それらの異常性は、それぞれの諷刺対象を厳しく攻撃し、読者に正常で健全な状態を思い起こさせるために、極度に誇張された極端な形で提示されていた。また、ガリヴァが「医術」の心得のある「船医」であるという設定には、ガリヴァの行為や態度に関しては、物語上の自然さを与え、彼の語りの内容には信憑性を与えるという役割が与えられていた。また、それだけでなく、「船医」であるという設定自体が、怪我や病気、畸形や異常を材料にした様々な諷刺を、作者スウィフトが効果的に遂行して行くための要件の一つでもあったのである。『旅行記』の大半を通じて、心身共に健康を保っていたガリヴァは、物語の結末では、ヤフーと人類の区別ができなくなってしまい、「人

間嫌い」という「狂気」に取りつかれてしまった。だがその「狂気」から彼が回復する可能性は否定できないものであるということを我々は指摘することができた。

スウィフトは『桶物語』 *A Tale of a Tub* の“The Preface”の中で印象深いことを述べている。「健康は一つで、いつも同じだが、病気は無数で、毎日新しいのが増える。人類の有する徳は、指で数えるくらいしかないが、愚行悪徳は無数で、時とともに増えていく」 “as Health is but one Thing, and has been always the same, whereas Diseases are by thousands, besides new and daily Additions; So, all the Virtues that have been ever in Mankind, are to be counted upon a few Fingers, but his Follies and Vices are innumerable, and Time adds hourly to the Heap.”<sup>17)</sup> 確かに数を数えれば健康は一つであるし、病気は無数にある。これは、人間にとって病気は数も多く、一旦それに罹ってしまうと人生に重くのしかかるものでもあることを、健康の数と病気の数の圧倒的な差に置き換えて強調した、いかにもスウィフトらしい、諷刺的な表現である。だが、無数にあるとされる病気の側から考えれば、個々の病気には、それから回復して行く先に、それぞれの病気に個別に対応する形で、同じ数の健康が想定されるとは考えられないだろうか。詭弁めいて聞こえるかも知れないが、つまり、人類には「病気」の数と同じ数だけの「健康」があるのである。

『ガリヴァ旅行記』という作品で暗示されているように、仮に、「健康」ではなく「病気」が、人類の恒常的な状態であるのならば、そして「病気」の最たるものが人類のかかえるヤフー性であるとするならば、ヤフー性を含むそうした「病気」全般から少しでも回復の方向へと人類を方向付けようとするのが、諷刺家スウィフトの意図の一つであり、諷刺作品『ガリヴァ旅行記』の主題の一つであると考えても良いのではないだろうか。むろん、それは様々に考えられる作品の主題の中では、第一のものという訳ではないだろう。だが、本論で扱って来たように、怪我や病気、畸形や異常に着目し、それらを通じて作品を読み直してみれば、健康であることや正常であることが、ヤフーである人類にとって、いかに得難い状態であり、またそれだけに望ましい状態であり得るかが、多くの読者には、とりわけ現代の読者には、実感することができるのではないだろうか。『ガリヴァ旅行記』から我々人類が読み取ることのできるメッセージは尽きることがないように思えるのである。

17) *A Tale of a Tub*, ed. A. C. Guthkelch and D. Nichol Smith (Oxford: Clarendon Press, 1920), p. 50.